

江北の四季

令和3年

2月22日

第44号



長浜市湖北町の田んぼでえさを食べるコハクチョウ

湖北地域の湖岸で700羽余りが越冬していました。充分に栄養をつけて、シベリアに向けて北帰行です。春の訪れとともに、冬の使者は湖北に別れを告げます。

○第五候、雨水、次候、霞始靄（かすみはじめ）
（かすみ）

二月二十三日〜二十七日。気温が少しずつ上がり始め、霞（かすみ）がたなびき始める頃。

寒波の間の晴れ間に、遠くに見える雪をかむった山々は、目の前にあるかのようにはつきりと見えていましたが、暖かくなってきた日にはぼんやりとしか見えなくなってきました。霞とは遠くの景色がぼやけている現象です。霞も霧も空気中の小さな塵（ちり）に集まった水滴が浮遊して、遠くがはつきり見えない現象ですが、霞は春にしか使わない言葉です。霧は「かかる」とか「立ち上る（のぼる）」とか言いますが、霞は「たなびく」と言います。

特に春は植物がまだ少なく土が露出しているので、土やほこりが舞いやすく、空気中の水滴が増えます。多くの水滴の粒が太陽光を散乱するので、春の空は白っぽくなります。だから春は自然全体がぼんやりとしているように見えます。

ところが、秋は空気中に塵や水滴はほとんどなく、あるのは小さい窒素や酸素分子などで、太陽光の内、波長の長い光（赤、橙、黄など）は通り抜けてしまい、波長の短い光（紫、青など）が散乱します。よって、秋の空は高く青く見え、部分的な寒暖の差で一部に霧が発生することになります。

だから、霞（かすみ）は目に入る風景全体に「たなびき」、霧や靄（もや）は部分的に「かかる」あるいは「立ち上る」ことになります。

ちなみに、着物や千代紙によく使われている「霞紋（かすみもん）」は、直線が横に何本か入って、霞（かすみ）がたなびく様子を表しています。

どうも元理科教師の癖が出てしまいました。蛇足ついでに、霞は昼の情景ですが、夜になると朧（おぼろ）と言うことになります。よって、朧（おぼろ）月は春の夜の月を指すので、春の季語です。



マンサク（満作）

☆マンサク（満作、万作）

俳句では季語として「金縷梅」と書きます。名前のいわれは、早春に他の花に先駆けて「まず咲く」が変化してマンサク、あるいは、花の様子が豊作を祈って踊っているように見えるので豊年満作のマンサク。秋の紅葉も美しく、茶花としてよく使われます。生け花に使いたくて植えたのですが、成長が遅い花木なので、未だに惜しくて切れずにいます。



ラッパスイセン



クロッカス

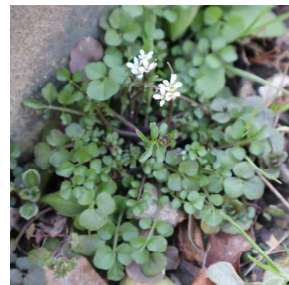
庭のあちこちから、霜や雪にも負けずに、早春の日を受けて、クロッカスが一斉に顔を出しました。ラッパスイセンは第一号です。菜の花をはじめ、黄色の花はまさに春の色です。

○第六候、雨水、末候、草木萌動(そうもくめばえいずる)

二月二十八日〜三月四日。草木が芽吹き出す頃。

少しずつ暖かい日が増え、庭を巡ったり、近くを散歩するのが楽しくなってきました。この時季の雨にはいろんな名前がついています。が、「木の芽起こし」や「木の芽萌やし」とも言い、ひと雨ごとに春がやって来ます。この時季、木の芽が膨らむことから、はる(張る)と言い、ここから、この時季の季節をはる(春)と言うようになったとも言われています。元々、大和言葉は音だけでですから、それに中国から伝わってきた漢字の意味の合うものを当てはめたのですね。まあ、いわれはともかく、芽の出る季節はめでたいです。

ちなみに、植物には「め(芽)」「はな(花)」「は(葉)」「み(実)」がありますが、私たち動物の体にも「め(目)」「はな(鼻)」「は(歯)」「みみ(耳)」があります。いにしえびと人は動物も植物も現代人以上に同じ生き物として見ていたのでしょうか。



ミチタネツケバナ



ハコベ

☆タネツケバナ(種浸け花)

苗代に播く前、種を水に浸ける頃に、花が咲くので種浸け花。水田の畔や水辺の湿地に生えます。園路に咲いているので、念のため調べてみると、帰化植物のミチタネツケバナらしい。おしべの数や葉の形が異なり、タネツケバナが六本の雄しべに波形の葉に対して、ミチタネツケバナは四本の雄しべに丸い葉です。

☆ハコベ(繁縷)

「はこべら」として出てくる春の七草の一つ。ヒヨコグサとも呼ばれ、子供の頃、卵の自家用に飼っていた鶏のエサとしてよく使っていました。暖かくなり、ホトケノザ、オオイヌノフグリ、ハコベなどが畑に咲き始めました。園路に咲いている分には可愛いのですが、畑に出てくると……、やっぱり雑草です。適当にむしらないと！

☆地の白梅が咲きましたので、生花の稽古です。先ずは月に生けてみました。

釣り金具がないので、台の上に。宙に浮いているつもりで。



左体に再チャレンジ。前回よりは自然に見えたような。



梅、菊、燕子花は上下の重、ともに大きくてもいいようです。紅梅と白梅で生けたいなあ。